

松崎慊堂の儒者・医者との交遊

郭 秀梅

順天堂大学医学部医史学研究室

『慊堂日曆』は松崎慊堂（1771–1844）の53歳から73歳までの22年間におよぶ日記である。現存の日曆は1823年4月14日に始まり、1844年3月19日に終る。同年4月21日に慊堂は歿した。

私は『慊堂日曆』（平凡社・東洋文庫）を通読して興味を惹かれた。本書は多くの文人学者や医者との交遊記録で、内容は広い分野にわたる。慊堂は医薬にも強い関心があり、とくに日曆の後半ではほぼ毎日、病気の悩みやつらい症状を書く。ゆえにしばしば医者と交わり、医書や漢方薬などの資料を数多く遺した。本報告では慊堂と儒者・医者との交遊と背景を紹介したい。

慊堂は狩谷掖斎と最も頻繁に往来した。慊堂は掖斎の最期に臨み、断腸の思いによる死別の言は『石経』の校文・淳化帖の話だった。掖斎の死後、その求古楼の珍本と漢器鏡など貴重品の売却では慊堂が大きく関与した。

医者では伊沢・多紀・渋江家のひとびとが慊堂を訪ね、病気を治療していた。また学問や漢文の作成や代筆を受けるなど、つながりは深かった。

文政11年3月28日に、「掖斎より書あり、本草図譜序例を促し、また酒を送る。貧厨はにわか富む」とある。この『本草図譜』は岩崎灌園の96巻の大作で、文政11年刊。狩谷掖斎を介し、その序例に慊堂が筆を加えた謝礼の酒に喜んだのだった。

天保2年7月16日に、「多紀君菑庭の先兄柳洪が纂せるところの医籍考の序を読み、改擬すること数十条」とある。一方、『医籍考』元堅の序文末には天保2年3月謹撰と記す。つまり7月に慊堂が修正したにもかかわらず、初稿の日付を書いている。

天保3年正月25日に、「大槻生瘍科新選序を定む」とある。『瘍科新選』は（独）プレック著・杉田立卿訳。巻首に法眼侍医「翠藍桂国寧清遠序」と「大槻磐溪敘」を付す。漢学者の大槻磐溪も慊堂の推敲を受けたことは、彼への信頼を物語る。

天保7年5月7日に、「薬性提要跋を代作し、その本を校す」とある。『薬性提要』は多紀元簡編、1806年刊。1836年には弟子の山本高明が修訂し、元堅序と山本題言を付した『訂補薬性提要』として刊行。その前に慊堂に代作と本文の校正を頼んだので、二氏の漢文は慊堂の手によるものと考えられる。

こうした事例は以上の数例にとどまる。この時代の医者が漢文を儒者に代筆してもらい、また修正を依頼したことは、とくに説明の必要もないだろう。

天保5年8月29日に、「衣関順庵、好んで偽書を作る。龍樹菩薩眼論のごとし。その余に数種あり。偽本の大同類聚方もまたこの人より伝わる。近日の神医方・金蘭方も、或いはまたこの人のなすところか」とある。こうした偽書に慊堂は怒りを隠さなかった。

晩年の慊堂はかなり衰え、医者や針灸を欠かせず、ときに医薬書を読み、自ら薬を作って服した。

天保11年4月4日に、「『神農本草百種録』を読む、以て症に中る薬を求む」とある。

天保12年4月15日に、「藍川老人（元慎）に就いて灸穴を求む」とある。慊堂は灸を好み、体調が悪いと多量の灸をすえた。それで藍川元慎を訪ねて灸穴を教わったのだった。

慊堂を治療した医者はおもに伊沢長安・磐安兄弟、多紀元堅、小島春庵、渋江道順、清川玄道など江戸の名医達で、様々な治療を受けた。慊堂は長く痔に苦しみ、蛭に吸血させたこともある。

天保9年12月27日の日曆に、「余は胎にありてより以来、煙を好むこと異常なり。六十八年間、病にて喫する能わざることはただ三四日のみ」というほど慊堂は愛煙家だった。死ぬ前の症状は咳痰・喘息・下痢だったので、死因は長年の喫煙と関係するかもしれない。

慊堂は病身でも学問の伝授をやめなかった。天保15年1月、大病中に淳化帖を閲覧し、「病痛の体にいるを忘れる」と「淳化帖慊堂後文」を書いた。これが慊堂の絶筆だった。その最期は、多紀元堅、伊沢長安、渋江道順が相次いで往診し、長安の処方した五苓散を服用。これで日曆が終了する。